

X 調査した蛇紋岩地区

### 調査コース

インドネシアについては すでにたびたびこの誌上に紹介されてきたので 今回私たちが 8月上旬から9月上旬まで 約1カ月駆け足でジャワを一巡りしてきても とくに新しく付け加えることもないと思われるが ここでは とくに印象に残った2・3のことを見聞したままに書いてみた

**ジャカルタへ直行** 羽田を朝9時20分に飛びたった飛行機は 現地時間20時20分 ジャカルタに到着する。所要時間11時間である。 3年ばかり前に私たちが行った時は 夜羽田を発ち 翌日夕方シンガポール着1泊3日目の夕方やっと着くことができた。飛行機も進歩したものである。 ジェット機は速いし揺れなくてなかなか快適であるが あんまり高い所を飛ぶので 窓から風景を楽しむといった気分はさっぱりである。

**独立記念日** インドネシアの独立記念日は 8月17日である。 これは年々行なわれる最大の国民祭日であるが 今年はやっと訳がちがいがい この祭日の1週間あと24日からアジア大会がはじまることになっている。 おりしも 西イリアンの問題は平和的解決の見通しがたち この独立記念日で盛り上がった国民感情をもってアジア大会へ臨もうという いうなれば この新しい国家がはじめて迎える大メインイベントの幕開きである。 われわれは 8月9日から自動車旅行をはじめたのであるが それこそ津々浦々 街道という街道には種々の

## インドネシアの旅

文 安斎 俊男・写真 菊池 徹

国旗がひらめき 村々の入口にはアーチが飾られ パレードの練習が行なわれるなど お祭り気分がわきかえっているのが感じられる。 記念日当日はちょうどバンドンにいたが 大変なにぎわいで バンドン銀座ともいべきプラガ通りは 身動きもできないほどの混雑ぶり。 私は3年前 ここに1年間滞在したが このような経験ははじめてである。

### ジャングル内のキャンプ生活

われわれの調査目的である蛇紋岩の存在する場所はなかなか大変な所であった。 8月11日われわれは 西部ジャワインド洋岸のプラブハンラツウという町から4トンほどのポンポン船に乗って南下した。 左手に見える陸地はすべてジャングルで人影はない。 沖では土地の漁夫がカヌーをならべて釣りをしている。 このカヌーも見えなくなると全く人影は見られず 大きなうねりの中にイルカの跳ねるのが見られるだけとなる。

4時間ほどして 小さな湾に入る。 この奥に小さな村があるという。 船長さんが 泳いで上陸 やがてカヌーを1隻引いてくる。 これを引いて出発 2時間ほどで美しい浜辺につき さあ上陸である。 本船は 100mほどの沖に泊まり カヌーに荷物を少しづつ積み 波打ちぎわにのし上げて荷下し これを何べんもくりかえす。 2時間近くかかって やっと荷物と全員が上陸できた。

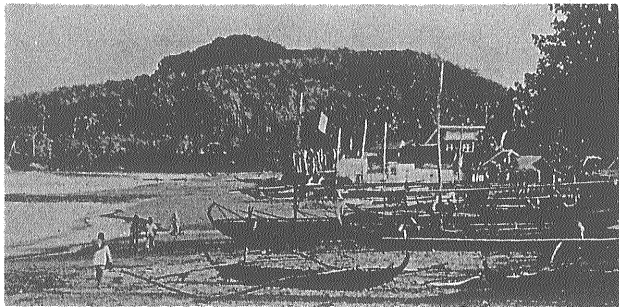


日本の建設会社により建てられたホテル・インドネシア(ジャカルタ)



8月17日は独立記念日  
各地でパレードが行なわれた(バンドン)

さて これからキャンプ地を捜すわけであるが 地図をたよりに川のある所へ行って見ると 乾季のことで水はかれ 石ころの多い河原に点々と水溜りを残すだけである。 比較的大きい水溜りの岸をキャンプ地ときめたくにとりかかる。 キャンプといっても 竹の柱をたて 天井にキャンパスを張るだけ その下にキャンパスベッドを並べ 各人天井から蚊帳をつるすしかけである。 他の人たちは池のふちに石ころを積み上げ 飯を炊きはじめる。 それらがすこぶるゆるやかなテンポで行なわれる。 けっしてせかせかせしたり どなったりしない。 そしていつの間にか 何とか形をなして行くのである。



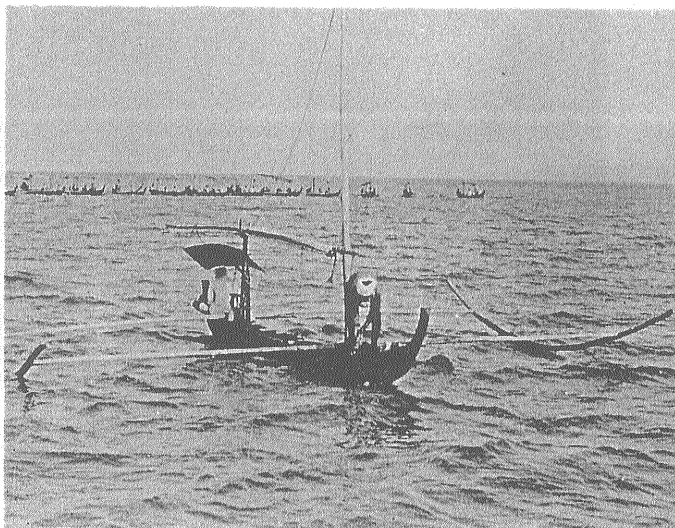
プラブハンラツウの海岸

もあまり開けなかった。

大体ジャワ島はよく開けていて ジャングルなどもう残っていないものと思っていたのはたいへんな間違いであった。 インド洋岸にはこんなジャングルがまだだいぶあるらしい。 後で聞いた話であるが この辺のジャングルには まだ 虎・野牛・にしき蛇 サイなどがたくさんいるらしい 河にはワニもいるという。 そういえば われわれ一行に鉄砲を持ったお巡りさんが数名ついてきてくれたのは 猛獣にそなえるためだったらしい不幸にして大トカゲを一匹見ただけで 虎などにはお目にかかれなかったが 野牛の足跡と骨はいたる所で見られた。 そしてジャングルで一番恐いのはこの野牛なのだそうである。 ジャングルの中は案外歩きやすかった。 ほとんど下草がなく それに大木の下は直射日光をさけて意外に涼しいのである。 ただいたる所に 2〜300 本の大竹の群生があり その幹部はトゲの生えた小枝が密生していて近よることもできない。 また大きくなるが大木から大木へからみあった所も近より難い。 毒蛇・毒虫もほとんどいないようだったし 鳥の声すら

目的とする蛇紋岩は海拔 130 m ぐらいの台地の上半を占め ここだけはジャングルが切れて草原になっており 台地の広さも 500 m 四方ほどあって まず採鉱地としては理想的なものであった。 台地の上はそよ風が吹きすぐ目の下に美しい浜辺 その先には果てしなく広がるインド洋 三方はうっそうたる大ジャングルに囲まれている。 ここに立って やがてこの台地に露天切羽が開かれ 索道にパケットが往復し ダンプカーが走る。 海岸には栈橋ができて鉱石船が横付けとなる。 ジャングルは切り開かれて住宅がならぶ。 そんな光景を目に浮かべているとき キャンプの苦勞もいつか忘れて まるでそれが目の前に実現されているような気がしてくるのである。 その時は是非もう一回やってきて 実際にこの目で確かめて見たいものである。

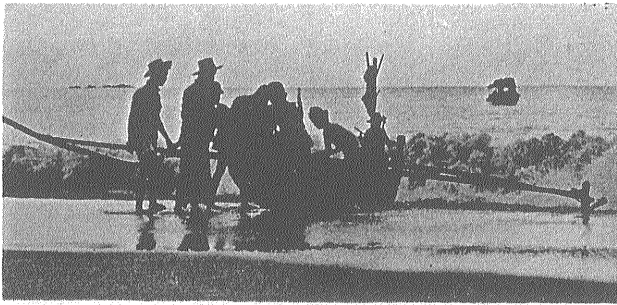
乾季にはぜったい雨は降らないものと決めていたのはとんだ間違いであった。 夕方から降りはじめた雨は ついに翌朝まで降りつづいた。 当然 キャンパスの天井はもりはじめ 雨水が蚊帳をつたってベッドへ落ちは



カヌーをならべて漁をする人々 (プラブハンラツウの沖)



パンジャルネガラからクワラサンへ  
調査隊に協力する現地人



インド洋の波は高いカヌーによる荷物の陸揚げは仲々困難だった（ツガールバミダンカン付近の海岸）

じめた。ついにいたたまれず すみの方へ雨水をさけそのまま夜明しをした。翌朝はまるでウソのように熱帯の陽光がふりそそぎ ビショ濡れの毛布もアツという間に乾いてしまった。

この調査が終ってジャングルからの帰途またひどい目にあつた。5晩をキャンプに過ごした後 夕方船が迎えにくる約束なので 朝食後すぐにキャンプ撤収にとりかかった。例よってのんびりと、ようやく午後4時浜辺に荷物を積みあげたが 約束の船がこない。やっと5時30分に沖に船がとまり カヌーに荷物を積みはじめる。7時すぎやっとジャングルから脱出 と思つたとたんエンスト しばらく修理してスタート またエンスト。今度は全然駄目らしい。船長はエンジンを分解して見るといいだす もしどうしても動かなければ——これは大変なことになった。カヌーでプラブハンラツウまで連絡に行くとなれば3日や4日はかかるだろう。食糧は乏しい。だんだん心細くなってくる。とんでもないことになってしまった。カン詰は船底につんでしまつて出せない。飲み水もない。おりから十五夜の月が洋上に上がり 南十字星は月の光に消され

た。せまいボートの中で荷物の間にはさまれ身のおき所もない。大きなうねりがきてボートが大きく揺れる

結局 翌朝になってエンジンが動きだした。でもプラブハンラツウの町に着くまで 少しでもエンジンの音が変わると一同の顔色が変わつた。顔色なしとはまさにこのことだろう。しかし 町に着いてしまえばこちらのもの 皆「いい経験だった」と得意顔である。恐らく 日本へ帰ってジャングルを語る時 話に尾ひれがついて やれ虎を追いはらつたの にしき蛇を踏みつけたの インド洋を一晚漂流したのと自慢話に興じることになるだろう。

### クワラサン部落のキャンプ生活

われわれの第2の調査地である中部ジャワ クワラサン蛇紋岩もひどい山奥にあつた。バンジャルネガラという町で30人近い人夫をやとつて荷物をもたせ 昼頃から炎天の山道を歩いた。途中海拔800mの峠を越えクワラサンに着いた時は真暗になっていた。部落長事務所の広間にキャンパスベッドを置いてここを寝室とし 飯をたきカン詰で食事をする。夜おそく はるばるバンジャルネガラからわれわれのために ガメラン音楽隊がきて演奏してくれた。聞けば県知事の命令だという。ガメランというのは打楽器だけの単調な音楽でやたらに長い。われわれが真面目に聞いていれば朝までやるつもりらしい。こちらは疲れきつていてベッドの上で聞いているうちに いつの間にか皆寝込んでしまつた。楽士たちもはり合いがなかつたことだろう。

朝になって顔でも洗おうと 水を捜してみても驚いた。谷川の水はかれ チョロチョロとした流れをためる穴には赤白っぽく濁つた水がほんのわずか。これで飯をた



クワラサンの蛇紋岩体



川を行く調査隊クワラサンから下山の途中

き茶を飲んだらしい。一同顔を見合せ あわてて薬をのむ。概してジャワではどこへ行っても水が悪い、きれいな水に恵まれている日本人にとっては とくにこれは苦痛である。1カ月の間 われわれは常に水を気にしつづけた。幸い何事もなく済んだが これはかなり大きな問題であり 何か手軽な水を浄化する薬品でもあれば 今後 海外での調査に大いに役に立つことと思う。

クラサンの蛇紋岩は 第1の調査地ジャングルのそれよりも小規模で 品質も低いようであった。しかしこの山奥にもトラック道路が開け どんどん鉱石がでるようになれば カンポンの人たちにどれだけ大きな恵みがあるだろうかと思えば こども同時に開発したい気持ちにかられた。

### アジア大会のことなど

われわれ一行は8月30日ジャカルタに戻った。報告書の作成やら挨拶やら 忙しい中で 一回はアジア大会を見物したいものと思っていたが 幸いサッカーと水泳の切符が手に入った。

ジャカルタの夜はたしかに明るくなった。これはアジア大会だけのためではなからうが 大通りの街灯は蛍光灯が輝き 会場付近の大ロータリーには七色の噴水までできている。さらにメインスタジアムをはじめ 各競技場がいっせいに蛍光灯をともし 大小さまざまな競技場が銀色に輝いているさまは全く驚くほかなかった。敷地のせまい東京のオリンピック会場では この壮観は再現できないだろう。まさに国の力を結集してこの大会に臨んだ意気込みがうかがわれる。会場は ジャカルタ中心部とクバヨラン住宅街の中間の広大な敷地を占めているが その手前には日本の協力によってできた14階建のホテル・インドネシアの壮麗なビルがそびえ

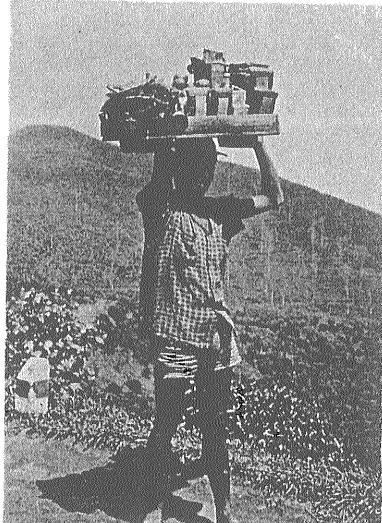
ている。ブルーとイエローにいろどられたこのビルはできたばかりで どこもここもピカピカである。全館エアコン 熱湯 冷水がで 食事も一級である。

夕方4時からメインスタジアムでサッカーを見る。観覧席に全部屋根があるため 10万人収容の大スタジアムが意外に小さく感じられた。サッカーはインドネシアの国技でもあるのでスタンドは超満員 熱心に見いている。ハーフタイムの時 射撃のビクトリー セレモニーがあった。日本の選手が中央の台に立って金メダルを首からかけてもらう。つづいて観衆が起立 日の丸がポールに上がる。君が代の演奏 一瞬シーンとなる。やはりいいものである。まわりの観衆がわれわれを日本人と見て ニコニコと笑いかけてくる。

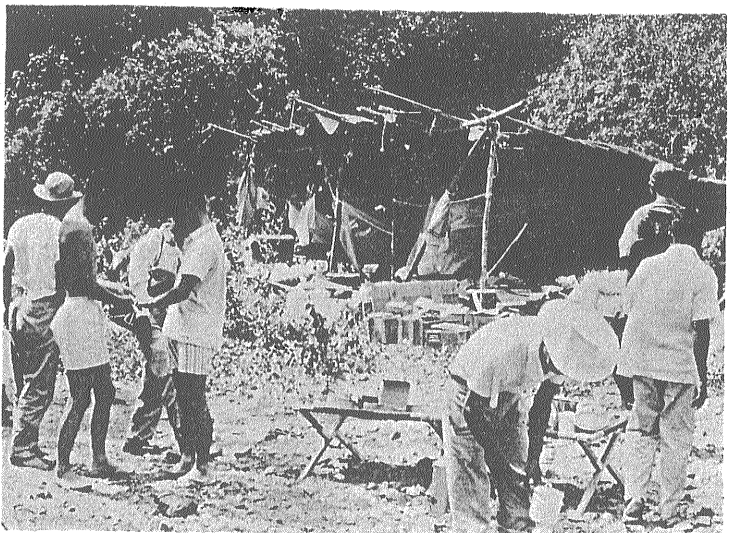
もっとも在留邦人の話では 第1日目は感激したけれど あまり日本人ばかり勝つので もうどうでもよくなったとのことだが。

ジャカルタの町には大会にそなえて 真新しいベンツのタクシーがたくさん走り回っていたが それにまじって日本の軽三輪トラックが 4人乗りのタクシーとして活躍していた。三輪自転車のベチャの名をとって ベチャモートルと呼ぶそうである。なかなか好評のようであった。ホテル・インドネシア ベチャモートル それにもう1つの日本からの新来の品は新しくはじめられたテレビである。街頭のショーウィンドウや食堂のテレビに大勢人がたかっている風景は 何年か前の日本と同じようであった。

帰途ホンコンに寄る。台風により数百人の死者を出した由 街路樹が根こそぎ倒れているのがすさまじかった。ホテルの湯水は午前中2時間だけ どうも今回の出張は最後まで水にたたられたようである。(筆者は鉱床部)



車がとまると物売りがやってくる (ブンチャック峠にて)



これがキャンプである ここて丸一夜雨にやられたのだからズブぬれも無理ないはなしだ